

地域資源をどのように見いだすか それをどう生かすか

東京大学先端科学技術研究センター教授

にしむらゆきお
西村幸夫



大災害後のまちづくり

これまでもまちづくりには地域の個性やアイデンティティが重要であることは誰も耳にたがえるほど聞かされてきた。地域の魅力づくりのために風景や伝統行事、食や食材など、さまざまに地域をプロモートする試みが各地でなされていることも各所で紹介されてきている。

ただ、東日本大震災後や9月に紀伊半島を襲った台風12号の豪雨による土砂災害など相次ぐ大災害を経て、今後のまちづくりを考えることは、被災地ではなくても、これまでとは異なった視点が必要であるように思える。そうでなければ、災害復旧や震災復興などの大規模プロジェクトの陰に隠れて、地域資源を生かしたまちづくりには光が当たらないといった偏狭な視点からではなく、地域の将来

を考えると、地域資源とは一体何であるのか、といったより本質的な視点が求められると考えるからである。

では、異なった視点とは一体どのような視点なのか。

恐らくこれまで得てすると表層的にとらえられがちだった地域の個性や魅力といった見方を、より突き詰めて考える必要が出てきたということだろう。美観的な「景観形成」や話題提供のための「イベント」ではなく、より根源的に必然性を感じられるまちづくりの手掛かりとは何かを考えなければならぬのである。地域に対する一層深い構想力が試されているのである。

この問いに現時点で確たる回答があるわけではないが、少なくとも次の一見当然と思えることを共通して確認することから始める必要があるように思う。

大枠としての大地形やインフラ

第一に、地域の本質的な資源とは、大災害によっても変わらない地域の個性に根ざしたものであることである。その典型例は、大規模な地形的特色であろう。山や海、丘や坂、川や入り江などが織り成す地域の風景は、よほどの大災害でも変わらない。

つまり、このような地域の大地形によって立つような地域の個性を発掘することである。例えば、里山や里海、そこでの山の幸や海の幸、さらにはそうした地形がもたらす産業が生み出した光景はどのような災害があっても普遍的な地域の価値であろう。重要な地形的な特色やその風景、そこからの眺望なども結果的に地形が生み出した特徴であるといえる。

第二に、都市の目抜き通りや駅前通りなど

の主要幹線もめったなことでは変わらない。さらに学校、駅、役場といった誰でも共通して利用できる大規模施設も、たとえ被害があつたとしても再建がもちろん最優先の課題となることは疑いない。都市の骨格を決めるようなこうしたインフラとその構成も都市の個性であるといえらるだろう。

こうした都市施設のほとんどは近代の産物であるので、これらはある意味、都市の近代化の生き証人であるということもできる。

文化的景観や信仰など

第三に、地域の風土に根ざしたものであること。雪の季節や梅雨の時期、盛夏の情景、紅葉の色彩など、季節ごとの特色はまさしく地域独特のものである。これに田植えされたばかりの水田や稲穂の色付き、棚田の風景、いさり火や海苔ひび、植林された林など、生業が生み出した風景を加えると、地域の個性は一層彩りを増す。

山の雪解けの形が生業の準備と密接に関連した習俗を生み出した雪形や防風林の風景などを加えると、近年盛んに注目されるようになってきた文化的景観というものの見方とぴったりと一致することになる。

第四に、長年培われてきた地域の習俗や信仰に根ざしたものであること。祭りや芸能に

は物理的な災害を乗り越えるだけの力が備わっている。小正月の行事や地藏盆など、それぞれの地域には似ていながら少しずつ異なるさまざまな儀礼や風習が残されている。

これに宗教行事や祭礼の神事を加えると、日本はさながら無数の無形文化遺産があふれかえる近代国家であるということができ。これも大災害を越えて慣性を継続させることができるインフラであるといえる。そしてそれらを支える場としての神社や祠があるとするならば、それらの立地も不易のものであろう。

第五に、さらに根源的には、城下町や宿場町、在郷町といった都市の由来そのものも、変わりようのない都市の個性である。ただし、都市の由来という現在の都市の課題とはかけ離れた話題としてとらえられ、都市紹介の単なる枕ことばのようなものとして、あまり意識されずに取り扱われてしまっていることが少なくない。

都市のこうした固有性をどう評価するか

大災害にあつても変わらないものをその都市の最も根源的な固有性、個性のようなものだとすると、それは短時日のうちに創造したり、意識して発掘したりすることによって初

めて明らかになるような性格の表層的な都市の資質とはまったく異なっているということがいえる。

さらに言うと、いちずに空間の画一化・効率化を進めてきた日本の都市の近代化にとって、このような固有性とは、都市の制約条件そのものであり、ある場合には障壁そのものでもあつたともいえる。都市空間の画一化・効率化とは対極にあるからである。近代化にまい進する当時の人々にとってはそれは必ずしも尊重されるべきものとは映らなかつたに違いない。

一方で、これらの「変わらないもの」を列挙してみると、それら自体は所与のものとして都市が置かれている前提のような条件に過ぎず、努力して生み出した地域資源とは異なるように見える。五点挙げた「変わらないもの」相互の関係も見いだしがたく、今後のまちづくりにどのような手掛かりとなり得るのか、はなはだ心許ない。つまり、「変わらないもの」として挙げたものは都市の前提条件としての要素に過ぎず、ここにいかに都市の個性を色付けしていくかは、その後の努力にかかっているように見えるのである。

しかし、もう一度、都市にとって「変わらないもの」を見つめ直してみよう。ここに、うわべだけの美観術ではない、都市にとって

本質的な地域資源が隠されているといえないだろうか。

例えば、上記五つの要素は、それぞれ独立したものだろうか。

都市の由来や立地は、大構造としての地形を抜きにして考えることはできない。主要都市施設の配置や骨格となる幹線道路のレイアウトは、当然ながら都市の機能に即して古来より計画されており、その都市の機能は都市の立地や地形という制約条件のうちにある。祈りや風俗の形の大枠はやはりその場所の大地形に規定されており、地域の気候風土にも依拠している。都市における人間活動も、大きく言えば、都市の物理的な環境に立脚しており、都市の物理的な環境は、以上のような連関の中にある。



つまり、大災害の前後においても一貫した都市の要素というものは、ある一定の構成原理の中で統一的に理解できるものなのである。その構成原理とは、まさしくそれぞれの都市がよって立つまちとしての構想そのものであるということができる。

地域資源とは、究極のところ、都市の構想をいかに受け継ぐかを考えていく際に、ようやく見えてくる手掛かりとしてあるのではないだろうか。

もちろん、もっと分かりやすい地域資源と一般にいわれているものはある。文化財建造物や巨木、名所の風景、古来伝承の由緒地など、これまでも一般に地域の個性をつくり出すものと考えられてきたような資源である。

当然、これらの点的な資源は、都市にとって重要な宝なのであるが、それを単に表層的に磨き上げたり、つなげたりするだけでなく、それがなぜそこに存在しているのかという理由を掘り下げることによって、より根源的な都市の構想力といったもの自体に迫れるのではないかと考える。そうした作業を経ることによって、従来、パーツとして扱われてきた点的な資源の持つ意味が深まっていくことになる。たとえ大災害で壊滅的な被害を受けたとしても、復興の手掛かりが一つの地域資源として再生するという道筋も見えてくるのである。

つまり、地域の構想を継承するといった視点で自らが住むまちを見直す時、地域資源もおのずと見いだされるといえる。これまで知られていた地域資源も別の光が当たることになるだろう。

都市の個性・固有性を論じるといふことは、このような作業を繰り返すということにほかならない。単純にオンラインワンを発見したり、創造したりすることではない。オンラインワンは、地形を見て、都市の由来を考え、都市施設の配置を確かめ、気候風土を感じ、生業や信仰の姿を体感することによって、おのずと見いだされていく都市の個性なのである。それは都市をどのように構想したかといった過去の努力の蓄積のたまものでもある。

近年、景観法や歴史まちづくり法が制定され、各地で地域の風土や文化を核にまちづくりをしようという動きがこれまでも増して広まってきている。これは表層的な歴史文化版美顔術ではない。作業の本質は、都市の個性・固有性を再発見する努力を今日も続けることによって、現代版の都市構想力を実体化することである。その努力はおのずと歴史や文化の森に分け入っていくことを要請することになるから、私たちはこの道をたどる必要がある。